

転生IS記～仮面ライ  
ダーを添えて～(仮)

上海・人形

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ある意味死んだ主人公が仮面ライダーとガンダムに乗つてIS世界でウダウダする

話

タグは必要になる度追加します

自分で読んでいて読みにくかったのでキャラのセリフだけセリフの前に名前を入れ  
ます。イキナリで申し訳ありません

# 目 次

ケフィアですか？いいえ、転生です

1

転生した先は○○○○

開匣・・・違った、邂逅です

N E W学しました

14 9 5



# ケフイアですか？いいえ、転生です

s i d e 主人公

やあ！皆！メタいこと言うと第1話の初つ端だよ！さて、俺こと沢木縁（えにし）は今何処にいるでしようか？

正解は自称神さまのお仕事場です、デスデス。と言うか神さま（自称）の仕事場つて普通のオフィスの様な所なんね、強いて言えば窓が一つも無い位の違いしか無かとです（ヒロシ風）因みに、私はオフィスに併設された簡易の応接間のような、休憩所のような所のソファに座つてコーヒー啜つります。

神 「おーい、人の話聞いてる？」

縁 「ここに人は自分しか居ないんで神さまwの話は聞いて無いです」

神 「此奴、ヌツコロしてやろか」

縁 「無駄な話止めて本題に入りません？」

神 「チツ！まあいいや。取り敢えず、君がどうなつてここに居るか分かる？」

縁 「どうせ死んだんだろう」

神 「軽いねえ。けど、違うんだわさ」

## 2 ケフィアですか?いいえ、転生です

縁 「じやあ、どう云うこつたい」

神 「空間に歪み<sup>ひずみ</sup>が出来て、そこに君は落ちた結果、肉体から魂魄が抜けたのさ」

縁 「死んだのとどう違うのさ」

神 「死ねば肉体の活動が止まり、魂魄が抜ければ止まらない。位しか変わらないね」

縁 「実質的に死んだも同然であると」

神 「そゆこと、歪みの原因もうちの部下にあるしね」

縁 「ふーん。で、どうしろと?」

神 「簡単さ、こちらから提供する特典（選び放題）を3つまで選んでこちらが提示した世界で生きて欲しいのさ」

縁 「リストは?」

神 「随分と物分りがいいね、もつと喚くものだと思つてたのに」

縁 「メンドイ」

神 「あ、そう。これがリストねー」

・ I S 適正

・ 専用機の複数持ち

・ ニコボ、ナデボ

- ・料理チート
- ・身体能力チート
- ・頭脳チート

etc . . .

縁 「マトモなのが少ねえな」

神 「知らんよ」

縁 「じゃあ、一つ目が料理チート、二つ目が身体能力チート、三つ目が古武術の指南書で」

神 「え? IS適正は?」

縁 「要らんよ」

神 「なしてですか」

縁 「と言うか、リストの初っ端で何処行くかネタバらくらつて行こうとはならんて」

神 「チート増設してIS適正と複数専用機持つていいら」

縁「必死だねえ」

神「こつちのルールで転生者がそのストーリーを知ってる場合絶対絡ませないと不可以ないの」

縁「メンドくせえな」

神「そんなこと言うなよう!俺だつてそう思つてんだからさ」

縁「しゃあねえ、受けるわ、専用機はホツパーゼクターとガンダムのWゼロカスで宜しく」

神「じゃあ宜しくね、因果の交差路にてまた会いましよう」

その言葉と共に俺の体は透けて消えていくここで俺は気づいたことを言おうと思う

縁「それ、シャナのパクリだろ?」

そう言うと神さまはニヤリと笑い、俺の意識は消えた

s i d e o u t

s i d e 神

俺の消えた部屋

k 「アイツ、結構なオタクだつたんだな」

# 転生した先は○○○○

s i d e 第三者

男「やつとだ、やつと完成したぞ！かつての○○○のように、完成形がやつと出来たぞ！」

「ここは某国の人里離れた（非合法な）研究施設。ここでは日夜ある物についての研究が行われており、それが完成した為に研究者である男は歓喜している。

その物に異物が入っていることも知らずに：

男「これで洗脳まで行けば、織斑千冬と同じ物が我々も手に入れることが出来るぞ！さあ、生まれよ！織斑千冬のクローン！マドカなどと言う裏切り者を超える者よ！私の創造主の！言葉を聞け！」

クローンの少女（以下少女）「…………」

しかし、そのクローンは何も答えない。

男「？どうした？私のいうことを聞かなかいか！」

それでも、クローンは答えない。

男「なぜだ!?なぜ私のいうことを聞かない!?？」

ここで初めて、クローンは言葉を発する。

少女「誰がテメエみたいな奴の言うことを聞くんだよボケ」  
それは、明らかに侮蔑の色を含んだ拒絕だった。

男「貴様あ！創造主に向かつてその口の利き方は何だ！ん？」  
研究者はそのクローンが何かを手にしていることに気づく。

男「何だねそれは、見た所シヨウリヨウバツタの形の機械のようだが」  
しかし、クローンは研究者の言葉を無視し機会に話し掛ける。

少女「そうか、早くも俺を選んでくれたか、ならば、期待に応えよう」

男「何を言つている！」

少女「お前には関係ないだろう、ここで死ぬんだから」

男「貴様あ！」

少女「変身」

H E N S H I N

c h a n g e   p u n c h h o p p e r

クローンの少女は、茶色いバツタを思わせる見た目のロボットの様になる。  
そして少女は、バツタの足の部分を動かす。

少女「ライダージャンプ」

r i d e r j u m p

クローンの少女は、高くジャンプをし、もう一度足の部分を動かす。

男「逃げるつもりか！」

少女「そんなつもりは無い。ライダーパンチ」

r i d e r p u n c h

クローンの少女はそう言いながら、パンチではなく掌底を打つ。すると、右腕の機械が作動する。

クローンの少女は反動を利用して、離れた場所に着地する。

男「そんな、私がこんなところで死ぬ？ そんなこと、あつては…」

研究者は、最後まで言い切ることが出来ずに小さな爆発を起こして肉片も残さず消滅する。

少女「これからどうしよう。あと、パンチじやなくて、掌底だよな」

クローンの少女は、先ほど殺した研究者の事など無かつたかの様に独り言を言い始める。

—— 同時刻、日本、ZECT ——

こここの社長室には一人の男が座っている。

男は軽いウエーブのかかった髪和装と一見アンバランスな格好だが、着こなし、様になっていた。

? 「まさか、ホツパーゼクターがいきなりいなくなつたと思つたら、ロシアまで適合者を迎えていたとはな、これは、直々に迎えに行こう」

そこに一人の男が入つて来る

? 「天道！ ロシアでホツパーゼクターが使用されている！ どう云う事なんだ？！」

天道「うるさいぞ加賀美。ホツパーゼクターはただ、自分の適合者を迎えていただけだ、俺が迎えに行つてくる」

加賀美「お、おう。なら任せたぞ」  
て「ああ」

# 開匣・・・違った、邂逅です

s i d e 少女

少女「アニメ見てた時も思つたが、相変わらずクローンつてのは胸糞悪くなるな」  
あの後、研究施設内のクソどもを一人残らずスッコロした俺、私?ドツチャでもええわ。は、研究施設内の食料かじりながら、クソどもの残した研究内容を漁つていた。

少女「そうか、亡国企業は、国連の非公式下部組織で、ZECTはそこと時たま協力してるつて感じか」

? 「そうだ」

俺以外誰もいない研究施設内に、何処かで聞いた事のある様な声が聞こえた。

少女「ツ!/?」

俺がとつさに振り向くと、そこには水嶋ヒ〇が居た。

少女「天道総司!/?」

天道「そう、俺こそが天の道を征き、總てを司る男。天道総司だ」

少女「で?その天道さんが何時、何故ここに?」

そう、俺はここを占拠してから2日ほどしか経っていないから、来るにしてももう少

し遅いとタ力をくくつて居た。

天道「何、ZECTの技術でな」

少女「そうか、では再度聞くが何故ここに?」

天道「ホツパーゼクター、ここまで言えば分かるだろう?」

少女「ああ」

天道「その適合者であるお前を確保しに来たんだが、お前は誰だ?」

少女「俺?俺はそうさな」

そこまで言つたところで、頭の中に謎の懷かしさを伴つて一つの名前が浮かび上がる。

少女「沢木縁?」

天道「何故疑問形?」

縁「いや、元々俺はクローンだからな。名前なんざ元々無いのさ」

天道「なるほど、ならその名前でいい。そこで提案なんだが、ZECTに来ないか?」

少女改め縁(以下縁)「What?」

天道「ここはロシアなのに何故英語なんだ」

縁「え? 気分」

天道「そうか」

そう言うと天道は力無く首を振り、何かをあきらめたかの様な雰囲気を出す。

天道「取り敢えず、ZECTに来い」

縁「え、良いよ」

そんなこんなで、私は日本人としての新しい戸籍（ZECTが頑張った様である）で

日本のZECT本社に到着したのであった。

加賀美「天道！帰つて来たか！その女の子どもで攫つてきた！」

加賀美新の登場である

天道「此奴がホツパーゼクターの適合者だ」

そう言うと天道は俺を加賀美の前に出す。

加賀美「どうか、君がホツパーゼクターの適合者なのか」

縁「俺は、沢の近くの木で縁を結ぶ者。沢木縁だ」

加賀美「そ、どうか。俺は加賀美新、よろしくな」

縁「よろしく」

そう言うと加賀美は天道に話し掛ける。

加賀美「（なあ、天道。あの名乗りりつて）」

天道「（俺は教えていない）」

加賀美「（じやあなんで）」

天道「（そんなこと知るか）」

縁「？天道？加賀美？どうした？」

天道「いや、何でもない」

困惑している二人を他所に俺は勝手に資料を漁る。

天道「沢木、何をしているんだ」

縁「ゼクターの資料を漁つてる」

天道「何故だ」

縁「キツクホッパー、パンチホッパーの他にチョップホッパーは居ないかと思つてな」

天道「そんな物は無い」

縁「だよねー」

加賀美「縁つて天道以上にマイペースっぽいな」

縁「気にするな」

加賀美「気になるんだよ」

天道「まあ、矢車と影山の居なくなつた今は、貴重な適合者だ」

加賀美「そただけどさ！女の子を戦わせるわけにはいかないだろ！」

天道・縁「何言つているんだ」

天道「女であろうと適合者である以上は協力もらわなければならぬ」

チエ

リイ

縁 「こちとら殺人童貞卒業してんだ、今更だわな」

k 「ググググ」

突つ込みどころ満載な俺の反論に言いたい事が有りすぎて黙る加賀美であつた。

# NEW学しました

s i d e?

? 「これは予想以上にキツイ」

俺の名は織斑一夏。一応世界初の男性I S 操縦者でブリュンヒルデ・織斑千冬の弟だ。

なんやかんやあつて入学初日なんだがこれは予想以上にキツイ。二回目? 知ってる。

昔は妹も居たつて千冬姉が言つてたけど、確か円まどかだつたはず。

山田真耶「全員揃つてますねー。それじゃあS H R始めますよー」

教壇に立つのは山田真耶先生（先ほど自己紹介していて「回文みたいですよねー」て自分で言つて涙目に成つてた）。

山田「皆さんには自己紹介していただきます出席番号1番の人からお願いします」  
自己紹介か、なんていうのが1番いいんだろ。

山田「————くん、織——夏くん！ 織斑一夏君！」

一夏「はい！」

山田「織斑一夏君、ちゃんと自己紹介は聞いてなきやダメですよ。後、女人人に大声

で話しかけてもダメですし。最後に、織斑君の番ですよ」

一夏「あ、  
はい。すみませんでした」

山田「分かつてくれたならいいです。では自己紹介お願ひしますね」

一夏「織斑一夏です。」

教室の中の空気が少し冷えた。

あれ？千冬姉にそつくりな子がいる

ズパンツ！

？  
「マトモな自己紹介も出来んのか！」

一夏「げつ！李広！」

ズパンツ！

千冬 「誰が飛將軍だ！」

一夏「千冬姉、なんで此処に居るんだよ！」

ズドンツ！

千冬 「織斑先生と呼べ、馬鹿者」

一夏「はい、織斑先生」

なんで千冬姉が此処に？あと、さつき見かけた千冬姉に似ている子はだれなんだ？

S  
i  
d  
e  
o  
u  
t

1

織斑一夏がこつちに気付いたみたいだ、俺とマドカ（十中八九マドカだろうが）の事を見てやがった。死ねばいいのに。

そんなことを考えているとブリュンヒルデ様wwwは自己紹介を終わらせたようだ。取り敢えず自己紹介を終わらせるか、マドカのも聞きたいし。

マドカ「ファンタム・ラビット社所属沢木円華（まどか）だ。専用機のテストの為に  
kつ」

バギンツ！ズガツ！

縁「M s. ブリュンヒルデ、俺の妹に何をするつもりですかな？」

千冬「円が織斑ではなく、ふざけた沢木などと云う苗字を騙るのでな」

縁「はあ、俺の妹にイキナリ襲い掛かつたと思つたらうちの妹だ？ ふざけてんじや  
ねーぞガキ」

千冬「貴様！教師に向かつてその口の聞き方はなんだ！」

縁「常識も無い奴に私は教師だと言われても従うわきやねえだろが」  
千冬「私に楯突くとはな、教育的指導だ」

そう言うと織斑千冬は俺に殴りかかつてくる。拳に右手で掌底を横から掠らせ軌道をずらし、水月に右肘を叩き込む。

千冬「ゲホッ！ガホッ！」

縁「俺みたいなのにやられるとはブリュンヒルデってのは安い称号だな」

縁「見ろ、1年1組。これが現実だ。これがブリュンヒルデだ。気に入らない奴は力でねじ伏せる、これがこの女のやり方だ」

縁「紹介が遅れたな、俺は沢のそばの木の下で縁を結ぶ者。沢木縁だ。そこの沢木円華と姉妹で、同じくファンタム・ラビット社とZECT所属だ。正直言うと俺は家族に危害を加える者には容赦はしない、そのブリュンヒルデの様になりたくないなら危害を加えようとは考えないことだ。」

あーヤダヤダ、教室の空気が凍つてるよ。（俺のせいだつて？知つてる）  
こんなんだと友人出来ないかもな。

そんな感じでSHRは終わつた。

あ？ブリュンヒルデ？とつくる昔に担架で運ばれてつたぞ。